北海道教育大学　へき地・小規模校教育研究センター（通称：へき研センター）
Hokkaido University of Education Research Institute for Remote and Small School Education（aka HUERISE）
令和６年１２月２日発行　第１５４号

へきけんニュース

ホームページ　https://www.hokkyodai.ac.jp/edu_center_remoteplace/
メールアドレス　kus-hekiken@j.hokkyodai.ac.jp
☎ 0154-44-3291　FAX 0154-44-3292

背景は北海道教育大学旭川校

北海道教育大学へき地・小規模校教育研究センター

へき地・小規模校教育研究センターを ケープペニンシュラ工科大学の教員が視察

へきけんニュース第114号（令和４年10月13日発行）で広島大学等からの教員の視察についてご紹介しています。今回は、その続編です。

約２年前の本センターへの訪問をひとつのきっかけとして、2023年６月１日に日本学術振興会の二国間交流事業が採択されたことにより、広島大学、大阪大学、広島商船高等専門学校の教員からなる日本側メンバーと、今回の本センターを訪問したケープペニンシュラ工科大学（南アフリカ・ケープタウン）で教員養成に従事する先生方との研究交流が始まりました。

そして2024年10月６～７日、その事業の一環として、本センターの視察が実現しました。なお日本学術振興会の二国間交流事業は、二国間の研究チームの研究交流を通してネットワーク形成、研究の発展を支援するものです。

詳しくは日本学術振興会のＨＰ　二国間交流事業をご覧下さい。https://www.jsps.go.jp/j-bilat/semina/gaiyou.html

へき地・小規模校を結ぶ遠隔合同授業の最前線に触れて

牧　貴愛（広島大学）　下田　旭美（広島商船高等専門学校）

今回採択された二国間交流事業は「南アフリカと日本における教授工学の知識を備えた教員養成の比較研究」をテーマとしています。事業期間は2023年６月１日から2025年５月31日までの２年間です。

2023年度は、11月15～26日にかけて、南アフリカのケープペニンシュラ工科大学の先生方と西日本合同フィールドワークを実施しました。福井大学教育学部ならびに福井市明新小学校、 兵庫教育大学先端教職課程カリキュラム開発センターならびに附属小・中学校、広島大学教育学部技術・情報コース、福山大学を訪問しました。 また、フィールドワーク終盤は、第13回アジア比較

教育学会（広島国際会議場）に参加・発表し、研究者ネットワークの構築の機会を得ました。とくに、教員養成フラッグシップ大学として指定されている福井大学、兵庫教育大学、それから広島大学を訪問し、ICTを活用した教育実践ができる教員をどのように育てているか、最新のSTEAM教育や教職志望者の向けのICT活用教育の講義、先生方との意見交換の機会をもつことができました。この訪問時に学ばせて頂いた内容は、ケープペニンシュラ工科大学の先生方が編者を務めた右写真の洋書籍（Maki, T., Sakaguchi, M., Sakata, N., & Shimoda, A. (2024). Preparation of Future Teachers Teaching with Technology. In Routledge eBooks (pp. 43 - 59). https://doi.org/10.4324/9781003406631-4）に寄稿しました。

事業２年目となる2024年度は、上記研究課題のもと、南アフリカの先生方の研究関心に即して、2024年10月４～16日の約２週間の滞在期間中、北海道教育大学釧路校へき地・小規模校教育研究センターを中心に、複式教育、遠隔授業に焦点を合わせた日程を組みました。10月５～８日は、釧路市に滞在し、北海道教育大学釧路校へき地・小規模校教育研究センターの玉井先生、川前先生、小野先生に、研究課題に関連する視察先の提案を頂きました。

10月６日の午前中は、先生方からご紹介いただいた釧路市こども遊学館を訪問しました。南アフリカの先生方と一緒に、身体を動かしながら、科学の面白さ、楽しさを感じる機会となりました。午後は大学にお伺いし、川前先生の集中講義へき地教育実践論を参観させて頂きました。翌日からへき地校での教育実習を控えた学生さんを含めて４名が受講している講義では、南アフリカの先生方の関心に合わせてICT（一人一台端末）を活用した各教科の授業の指針、免許外教科担任の許可件数のお話があり、小規模の中学校が増えていることを教えて頂きました。その際、川前先生から受講している学生に「みなさんがへき地・小規模校の中学校の校長先生になったとして、６名の教員を配置できるとしたら、どの教科の先生を優先的に配置しますか？」という問いが提示されました。唯一の正解はもちろんないのだと思いますが、へき地・小規模校の生徒の高校受験のことを考えたり、音楽といった専科のことを考えたり、教育実習校の教員配置も学習ポイントのひとつであることを教えて頂きました。その後、遠隔教育特例校制度のもとで行われている遠隔授業の動画を見せて頂きました。児童のタブレット（ノートパソコン）に映る相手側の児童の様子や、先生の様子、そしてタブレットなどのノートへの書き込みなど、ひとつの画面に様々な情報が提示されていました。そうしたシーンからは、双方の教室で起こっていることを一望できる良さ、他方で、児童に届く情報量の多さという点で、モニターの効果的活用について考えるきっかけを得ました。

講義参観後は、玉井先生、小野先生の案内で、釧路市立博物館を訪問しました。釧路市博物館では、釧路の自然やアイヌ文化を知ることができました。その後、釧路市生涯学習センターまなぼっと幣舞・釧路市立美術館の最上階での夕食にお招き頂きました。

へき地教育実践論の授業視察

夕食会の様子

下田先生（左）と牧先生（右）

翌10月７日の午前中、へき地・小規模校教育研究センターにお伺いしました。玉井先生、川前先生、小野先生から同センターの紹介をいただいた後、遠隔合同授業についてより詳しいお話を伺いました。

遠隔合同授業に関する解説の様子

鹿児島県の徳之島での遠隔合同授業について動画を見せて頂きながら教室のモニターの配置について学びました。視聴させて頂いた動画では教室には大きなモニターが３台設置されていました。ひとつは、対面で参加している児童の後ろに、遠隔で参加している児童が映し出される大きなモニターです。これは教師が児童の様子をみとることを助けています。もう２台は、教室の前方に設置されていて、双方の学校の児童、そして黒板など共同作業スペースが映し出されていました。遠隔の授業ですが、教師と児童、児童同士のやりとりの同時双方向性はもちろん、その場で、一緒に学んでいるという感覚が得られる教室環境、そしてその環境をフル活用して授業を進められる先生方の姿に圧倒されました。オンラインの活用により、複式教育を単式化することをめざされていること、また、日本の教育実践のひとつの特徴だと思いますが、児童一人一人のつぶやきを含めた教師のみとりに課題があることを教えて頂きました。

対面の複式授業とオンラインの単式授業のどちらが高い教育効果が得られるか、児童が楽しく学ぶことができるか、学ぶ力がつくか、試行的な取り組みの最前線の話を伺うことができました。お話の終盤では、高校の小規模化も進んでおり、T-Base（北海道高等学校遠隔授業配信センター）が設置されていること、中南米を対象としたJICAの課題別研修の取り組み、ラオスでの複式授業プロジェクト、アラスカ大学との研究交流についてもご紹介を頂きました。約２年前に訪問の機会を頂いたことが、二国間交流事業の申請・採択につながり、そして、今回、二国間交流事業の一環として、貴センターを訪問する機会を頂けたことは大変嬉しく、また、学びを深める有り難い機会となりました。ご公務繁忙のところ訪問を快諾いただき、歓待いただきました玉井先生、川前先生、小野先生に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

HUE RISE訪問に関するリフレクション

アグネス・チゴナ、ニャライ・トゥンジェラ、ジョイス・カニエレレ（ケープペニンシュラ工科大学）

アグネス・チゴナ先生

HUE RISEへの視察は興味深く、目を見張るものでした。特に複式学級におけるテクノロジーの統合の機会と課題に関する議論は興味深かったです。

テクノロジーを活用すれば、STEM科目の担当教師がいない小規模校でも、担当教師のいる他の学校と遠隔教育を通して学習者に指導することができます。また、小規模校の学習者は、同様の遠隔地の教室にいる同級生とICT機器を接続して学ぶこともできます。

このハイブリッドな教授法と学習法を採用した教育アプローチは注目に値します。また、講義からは複式学級の指導には主に学年別指導アプローチと共通単元指導アプローチの２つがあり、それぞれの指導アプローチに長所と短所があることも学びました。

私たちは、複式学級の教授法におけるテクノロジーの統合について、さらに詳しく学ぶために、今後もHUE RISEと連絡を取り合っていきたいと考えています。

こうした知識は、南アフリカのへき地校の複式学級で指導に当たる教師を育成するために役立つでしょう。

ニャライ・トゥンジェラ先生

HUE RISEが取り組む革新的なアプローチから、へき地の遠隔学習の課題克服に向けた貴重な洞察を得ることができました。特に教育資源や教師へのアクセスが限られている小規模校の教育ニーズに対して「地理的・物流的な障壁はデジタル技術を活用して克服する」という戦略はEdTech研究者としてとても感銘を受けました。

注目すべき点のひとつは、「仮想教室」とオンライン学習プラットフォームの活用により、学習者と教師間のリアルタイムのやりとりを促進し、遠隔地の学習者にも都市部の学習者と同等の質の高い指導を提供できる点です。

私たちのケープペニンシュラ工科大学（CPUT）教員養成学部でも、低コストで使いやすいデジタルプラットフォームを導入すれば南アフリカの教育資源が不足する学校でも同様の実践モデルを可能でしょう。

南アフリカでは、科学・技術・工学・数学の教員が不足しており、その影響を最も受けているのがへき地校です。このシステムは、へき地校の学習者が教育コンテンツにアクセスし、オンライン上の同級生や教師との協働が可能になります。

これを実現するには、現職および新任の教師を対象にしたテクノロジーに関する研修が不可欠で、それによってへき地の教育の質を向上させ、学習者が置かれた環境や地域に関わらず、学習者が成長するために必要な支援や教育資源を確実に提供できると考えています。

ジョイス先生

南アフリカの先生方との集合写真

ニャライ先生（左）とアグネス先生（右）

ジョイス・カニエレレ先生

日本を訪問するのは初めてでしたが、特に「尊敬の文化」について多くを学ぶことができました。アフリカの多くの国々では、西洋化により独自のアイデンティティの要素が失われつつあります。しかし、日本では価値観、規範、伝統、そして強い帰属意識が世代から世代へと受け継がれており、これは今日、世の中では貴重なことだと思います。

教育実習生との懇談や、貴校の複式学級指導に関するプレゼンからは、貴重な洞察を得ることができました。複式指導の方法論は特に印象的で、１人の教師が異なる学年や単元の授業を同時に担当することは、人材を最大限に活用し、学習者中心の教育を実現していると思いました。

このアプローチは、サイエンス系の科目に有益であると思われます。南アフリカではサイエンス系の科目を指導できる教師が不足しており、特にへき地ではその傾向が顕著です。また、南アフリカでは、一部の地域で学習者が携帯電話やパソコンを通じてオンライン学習に参加することはありますが、学習者と教師がライブで積極的にやりとりする授業はまだあまり行っていません。教育にテクノロジーをうまく統合していた点は大変興味深い学びとなりました。

参加
無料

2025.2.7 Fri

13：30～17：00

第25回北海道教育大学へき地・小規模校教育推進フォーラム

遠隔教育の可能性と学校教育の発展条件

北海道教育大学駅前サテライト/オンライン同時配信

開会挨拶　田口　哲　　（北海道教育大学学長）

基調講演　13：30～15：10

講師・コメンテーター

淵上　孝　氏　（文部科学省総括審議官）

「教育政策の動向について」

シンポジウム　15：20～17：00

パネラーとテーマ

赤間　幸人　（北海道教育大学教職大学院特任教授）
「へき地・小規模校の遠隔教育特例校制度の活用と行政支援の役割」

福　宏人　氏　（鹿児島県徳之島町教育長）
「へき地・小規模校の遠隔合同授業の発展条件と学校力の向上」

川端　香代子　氏（北海道立教育研究所所長）
「北海道における遠隔研修の実践と学校教育の発展」

司会

川前　あゆみ
（北海道教育大学へき地・小規模校教育研究センター副センター長）

日本全国において、少子化・過疎化が進行する中で、学校統廃合ができない遠隔地域の学校では、学校規模も小規模校化しています。このような中で遠隔教育の多様な活用は、子どもの社会的発達や学修意欲の向上に大きな可能性を有しています。また遠隔地域の教員研修においても、遠隔システムの効果的な活用によって、研修を充実させることが可能となります。本フォーラムでは、教育政策の動向を踏まえつつ、遠隔教育の多様なあり方と可能性をとらえると共に、遠隔教育の活用をはじめとした学校教育の発展条件をとらえていきます。

主催　国立大学法人 北海道教育大学 hue https://www.hokkyodai.ac.jp/ へき地・小規模校教育研究センター

後援　文部科学省（予定）
北海道教育委員会
全国へき地教育研究連盟

お問合せ
北海道教育大学教育研究支援部連携推進課
札幌市北区あいの里５条３丁目１－３
TEL　011-778-0944

事前の申し込みが必要です。
下記HPお申込みフォームまたはQRコードからお申込み下さい。

https://www.hokkyodai.ac.jp/mail/47.html